

男子バレーボール競技におけるアタックコンビネーションの評価に関する研究

The study on the evaluation of attack combination in men's volleyball game.

1K09B195-3 水野秀章

指導教員 主査 倉石平先生 副査 松井泰二先生

【緒言】

バレーボールはその競技特性上、得点することによってセットを奪取することが目標論として存在し、得点手段として最も代表的な技術がアタックである。アタックによる得点を増やすため、誰がアタックを打つかを極力わかりにくくさせる手段としてアタックコンビネーションが生まれ、これに対抗する手段としてのブロックシステムと共に、発展してきた。現在主流となっているアタックコンビネーションは、コート中央から行われる高速のバックアタックである **bick** を含む、4人以上の選手によるアタックコンビネーションである。本研究では、北京五輪男子バレーボール決勝におけるアタックコンビネーションについて、クイックおよび **bick** によるコート中央付近からの攻撃および **bick** 単独での有用性とアタック結果との関係性を探ることに加え、アタック位置に基づいたアタック与効果貢献度を算出することによって、アタックコンビネーションを総合的に評価することを目的とした。

【方法】

2008年8月24日に行われた北京五輪男子決勝(ブラジル 1-3 アメリカ)における両チームのアタック 245 試技対象とし、試案のシートを用いてレシーブ評価や各種アタックの存在可否等の項目について調査し、両国におけるアタックコンビネーションの特性について比較検討した。また、試案の計算式に基づいてアタック与効果貢献度を算出した。なお、テンポやレシーブ評価等のバレーボールの用語について、それぞれ定義を行った。

【結果】

アタック特性について、アタック決定率においてブラジルは 39%、アメリカは 42%であった。アタック与効果率においてブラジルは 26%、アメリカは 20%であった。アタックコンビネーションについて、ブラジル、アメリカ、両国総計ともに4枚以上であった試技数において有意に多かった(ブラジル: $p=0.027$, アメリカ: $p=0.009$, 総計: $p=0.001$). **bick**

が存在していた状況はブラジル、アメリカ、両国のそれぞれにおいて有意に多かった(ブラジル: $p=0.001$, アメリカ: $p=0.039$)。攻撃枚数において、ブラジル(51%)、アメリカ(49%)両国ともに4枚攻撃が他に比して有意に多かった(ブラジル: $p=0.000$, アメリカ: $p=0.026$)。クイック **bick** 合計において、両国ともに2枚存在していた状況が他に比して有意に多かった(ブラジル: $p=0.000$, アメリカ: $p=0.039$)。ブラジルは B パス時の **bick** 存在率において高い傾向($p=0.083$)が見られた。与効果貢献度について、両国ともにその他のフロントアタックが最も高かった。両国において **bick** はブラジルにおける A パス時(C ランク)を除くすべてのシチュエーションにおいて D ランクであった。

【考察】

両国のアタックコンビネーションにおいて、参加人数が4枚以上で行った試技数が有意に高かったことから、4枚以上で攻撃を行うことで相手ブロッカーに対し数的優位性を得る戦術が、アタックコンビネーションを構築する上で前提条件となっていると言える。決定あるいは与効果の結果を示したアタックコンビネーションにおいて **bick** を含むコート中央付近から行われる高速攻撃の存在が、アタックコンビネーションにおいて有意に多かったことから、**bick** を含むコート中央付近から行われる高速の攻撃は、相手ブロッカーに対して数的優位性を保つことのできるアタックコンビネーションの構成要素であると言える。B パス時の **bick** 単独での有効性は確認できず、与効果貢献度からみても、ブラジル、アメリカともに **bick** を効果的に運用できていないと言える。与効果貢献度において上位ランクであったアタックについて、両国の依存度の高さは顕著であり、上位ランクのアタックを増やすことが今後の課題であると言える。今後はアタック位置を考慮したアタックコンビネーション評価の必要性がある。またブロックなど他の技術において転用が可能であり、さらなる研究がなされ戦術が洗練される過程において、バレーボールが持つ魅力や面白さが最大限に引き出されることが考えられる。